

折々の記 No147 : 首相の危うさ！

(H21/1023 記)

民主党政権が誕生して、2ヶ月弱、前原大臣と岡田大臣の動きが急であり、仙石行政刷新相も始動開始のようだ。鳴り物入りで出来たはずの国家戦略室が寂しい限りである。

相変わらずのご祝儀相場か。マスコミは総じて鳩山政権に対して好意的である。

マニフェスト原理主義の危うさを露呈しつつあるようだ。内政はまだ良い。外交や安全保障分野の危うさはどうだ。インド洋における海上自衛隊による給油作戦は、継続の見込みが薄れつつあるようだ。代わりに民生分野の支援を強化するとして、治安状況が厳しい中に文民や民間人を派遣することを考慮しているようだ。他国の軍隊に守られながらの民生支援は外国からはどのように思われるのか？

佐藤正久議員の現地視察結果によれば、10名の民間人が活動するためには190名規模の軍隊が必要であると言う。佐藤議員がアフガニスタンの治安状況をそのHPで紹介しているので、一読願いたいものである。

何れにしても、首相はじめ外交・防衛当局は、このような状況を踏まえて日本のありようを考察すべきである。マニフェストに謳ったからその様にすると言うような原理主義的な対応はやめるべきである。疑問を感じざるを得ない。国際公約の重みが重要ではないか？給油に代えてそれ以上に貢献出来る方法があって、それを国際社会が喜んで認めてくれるような方策があれば別だが・・・

現時点においては、実行可能性から考えて給油が現実的である。解かっているとしてもそれを言えない苦衷があるのかと思っていたが、どうもそうでもないようだ。

11月初旬のオバマ大統領の初訪日を控えて、日本政府特に鳩山首相が何ら決断できない状況のようだ。昨日の日経の社説は、久々に出色である。

それを紹介する。

「社説 日米同盟の危機招く「安保摩擦」を憂う」(10/22)

何のために太平洋を越えてきたのか。ゲーツ米国防長官は、そんな思いではないか。

会談した鳩山由紀夫首相、岡田克也外相、北沢俊美防衛相のだけれも、聞きたい話をしてくれなかった。インド洋の給油中止の見返りとなる支援の具体策であり、沖縄・普天間基地の移設をめぐる日米合意の確認である。

(中略)

ゲーツ訪日で明らかになった安全保障案件をめぐる日米摩擦は、政権交代に伴う一時的現象にとどめなければならない。懸案を処理できない現状が続けば、11月のオバマ大統領訪日も、今回と同様、言葉で成功を取り繕っても実質は失敗となる。

安全保障をめぐる不一致が長く続くようなことになれば、同盟関係は緩み始める。

オバマ政権は、同盟国日本よりも中国を信頼に足るパートナーと考えるようになる。北朝鮮問題をめぐる外交も、現在以上に中国ペースになり、日本には不満が蓄積する。ガス田をはじめとする日中間の懸案をめぐる交渉でも、米国の後ろ盾を失った日本の立場は弱くなる。

ゲーツ長官との間で懸案をめぐり合意しなかった事実をもって「対等な日米関係」を演出できたとする思いが、仮に鳩山政権にあるのなら、危険な自己満足である。

外相は普天間問題で日本の「困難な政治状況」を指摘して理解を求めた。選挙で大勝した後の与党幹部の口から出れば、調整力と指導力との不足に対する言い訳に聞こえる。

鳩山政権が繰り返す「日米基軸」が外交辞令でないとすれば、自らの判断で、給油の実質的継続と一日も早い普天間基地移設の実現に向けた具体的行動を示す必要がある。でなければ、日米同盟は名存実亡となり、緊急事態に機能しなくなる。

首相、外相、防衛相に危機感が足りない。それが同盟の危機だ。」



マニフェスト原理主義者の最たる者がひょっとしたら鳩山さんではないのかと思いはじめている。他の大臣よりも強く意識しているようだ。生来の生真面目さから変節と誇られることを畏れているように思える。リーダーシップを発揮しているようには見えない。首相の危うさを象徴する事案がある。

実は鳩山首相には、**自衛隊の最高指揮官であるとの自覚が足りない**ように思われる。現職総理大臣が例年出席して執り行われる市ヶ谷での自衛隊殉職隊員（昨年までの殉職者1798柱）追悼式に鳩山さんは欠席するという。平成7年の村山総理以降、全ての総理大臣が出席している。

代理を差遣するというのは、矢張り最高指揮官たるの自覚欠如以外の何物でもない。更に、自衛隊記念日の観艦式にも欠席のようだ。菅直人大臣が代理出席らしい。社会党の村山首相ですら（失礼？）観閲した。安倍首相は公務を縫ってヘリで往復したにも関わらず。

追悼式や観閲式等に首相が出席するのは当然の責務であって、自衛隊が好きとか嫌いとかの問題ではない。

首相のこの自覚のなさを心底憂える。これが外国に対して誤ったメッセージを発信することに繋がらねば良いが・・・(了)